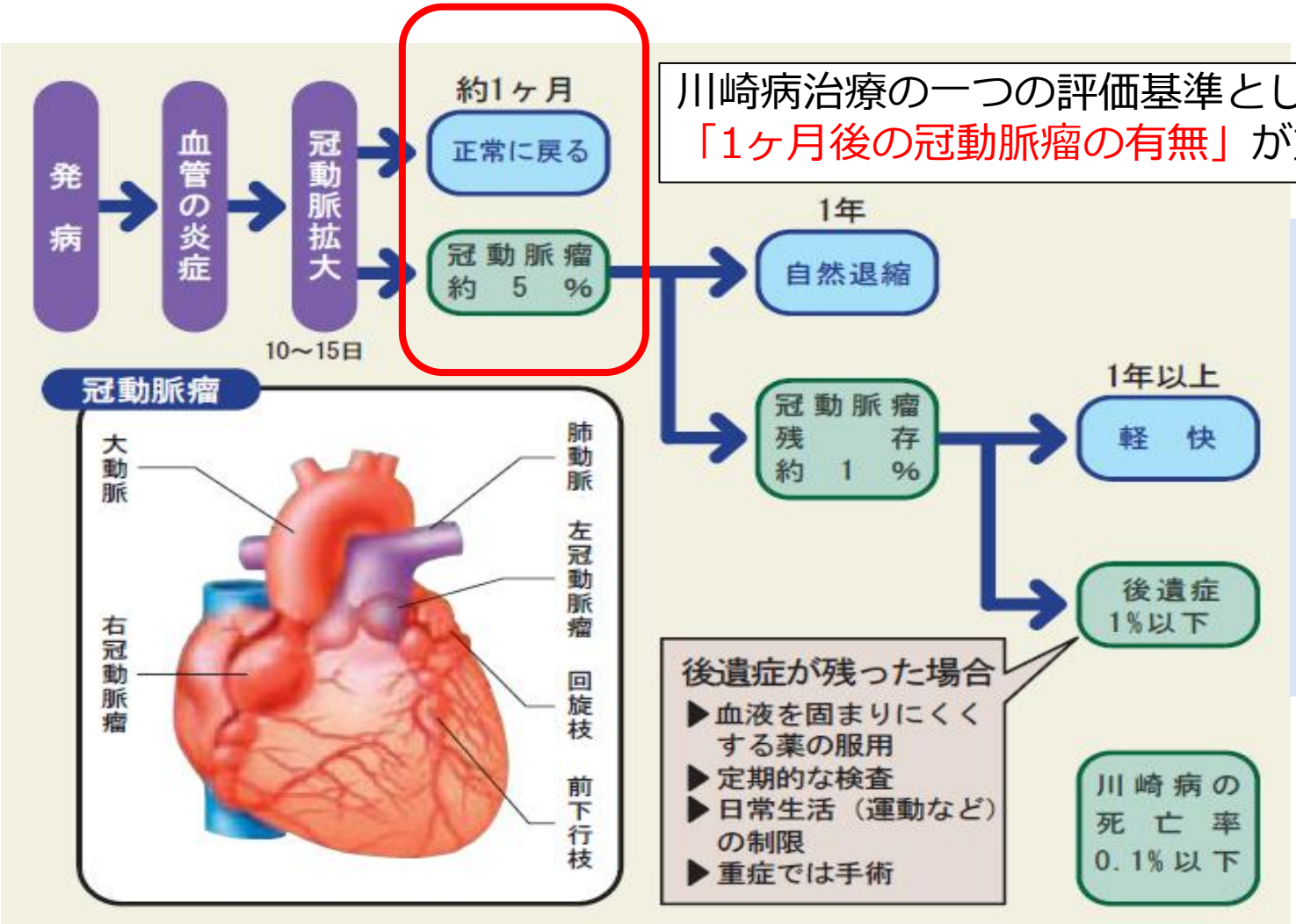
当科における
川崎病診療の成績2017-2024

静岡市立静岡病院
小児科　酒井秀政

川崎病は、①いかに早期に認知して
②いかに早期に炎症を沈静化させるか、で予後が決まる

（発熱6～10日目までに炎症を沈静化させる）



川崎病治療の一つの評価基準として
「1ヶ月後の冠動脈瘤の有無」が重視

※最近の冠動脈瘤に到るパターンは

①川崎病だと思われなかった症例
・症状が揃わない例
→不全型をいかに見つけるか？

②重症例で治療反応が悪かった症例
・グロブリンが効かない例
→重症例でいかに計画的戦略を練るか？

①不全型をいかに見つけるか？

川崎病は今も昔も「症状による診断」であり、特異的バイオマーカーは未だ存在しない。

①発熱

②両側眼球結膜充血

③口唇・口腔所見

④不定形発疹　または　BCG痕発赤

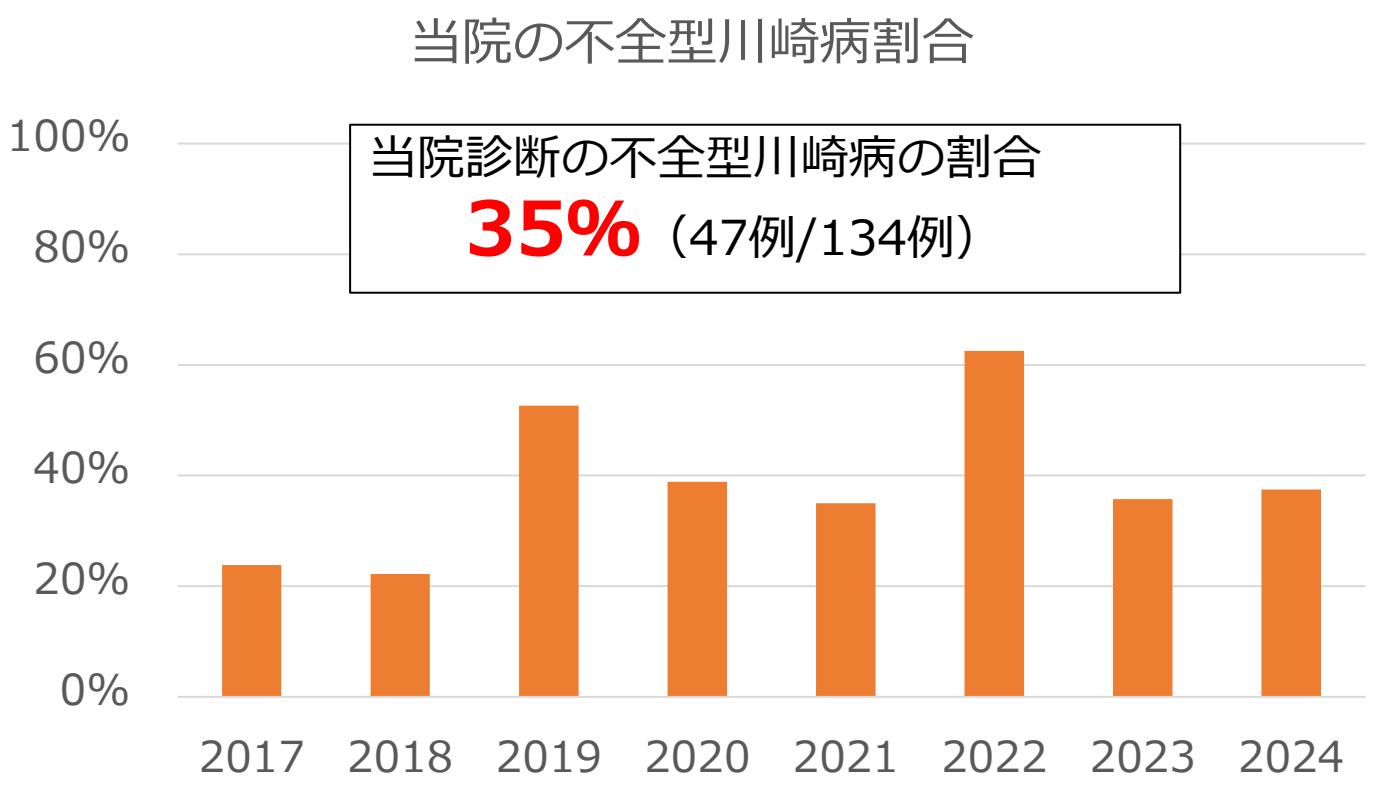
⑤四肢末端の変化

⑥リンパ節腫脹（1つ1つのリンパ節を触れる、というより、一塊となった腫脹）

症状5つ以上、もしくは、症状４つ＋冠動脈所見　→　川崎病確実例
それ以外の症例　→　不全型川崎病

不全型でも冠動脈瘤を起こす！
①②④はわかりやすいが、③⑤⑥に適確に気づけるか？　がポイント！

当院は不全型川崎病の割合が全国平均より多い



当院診断の不全型川崎病の割合
35%（47例/134例）

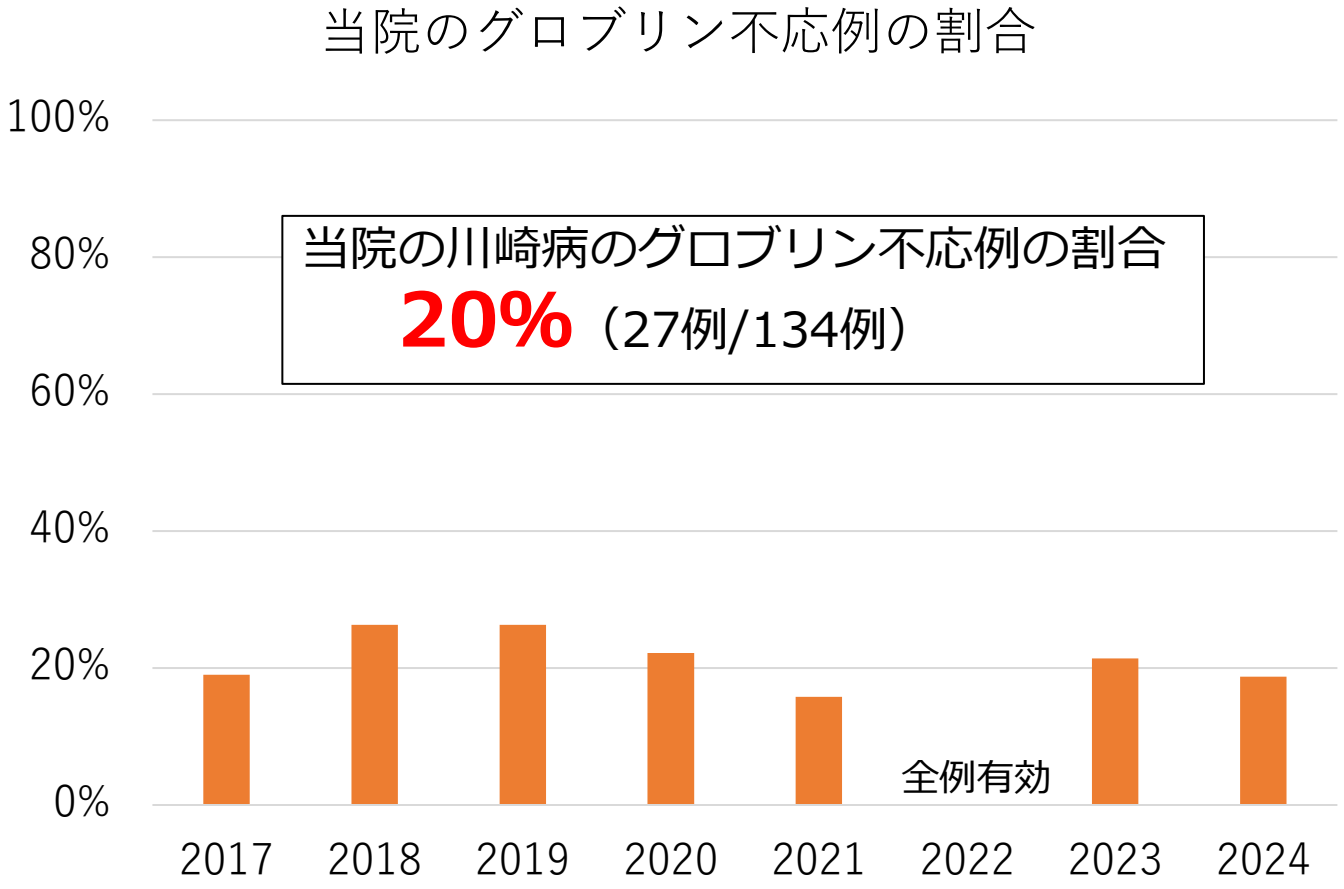
（参考）全国調査で不全型川崎病の割合はおよそ20-25%

診断しにくい不全型川崎病を
適確に診断している可能性？

川崎病ではない病気まで
川崎病と診断している可能性？
（over-diagnosis?）

川崎病としての治療までしなくても
治っていた症例が多く含まれているなら、
標準治療（グロブリン治療）不応例の割合が
全国平均より相応に少なくなるはず。

グロブリン不応例（≒重症例）の割合は全国と同程度



当院の川崎病のグロブリン不応例の割合
20%（27例/134例）

診断しにくい不全型川崎病を
適確に診断している可能性？

川崎病ではない病気まで
川崎病と診断している可能性？
（over-diagnosis?）

（参考）全国調査でグロブリン不応例の割合は24.4%（2021-2022）

②重症例でいかに計画的戦略を練るか？

初回治療 → 2日後 無効or再燃 → 2回目治療 → 2日後 無効or再燃（治療選択によっては翌日） → 3回目治療 → 2日後 無効or再燃（治療選択によっては翌日） → 4回目治療～

初回治療
- ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療
- 各種検査結果により、ｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝが効きにくいと予想される場合に以下
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療＋ｽﾃﾛｲﾄﾞ
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療＋免疫抑制剤

2回目治療
- 経過・各種検査結果などにより、最適と思われる方法を選択
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療
  - ﾚﾐｹｰﾄﾞ治療
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療＋ｽﾃﾛｲﾄﾞ
  - 免疫抑制剤

3回目治療
- 2回目と同様に選択
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療
  - ﾚﾐｹｰﾄﾞ治療
  - ｽﾃﾛｲﾄﾞ治療
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療＋ｽﾃﾛｲﾄﾞ
  - 免疫抑制剤
  - 血漿交換※

4回目治療～
- 2-3回目と同様に選択
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療
  - ﾚﾐｹｰﾄﾞ治療
  - ｽﾃﾛｲﾄﾞ治療
  - ｶﾞﾝﾏｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ治療＋ｽﾃﾛｲﾄﾞ
  - 免疫抑制剤
  - 血漿交換※

ステロイド併用治療がより強力なのは間違いない！

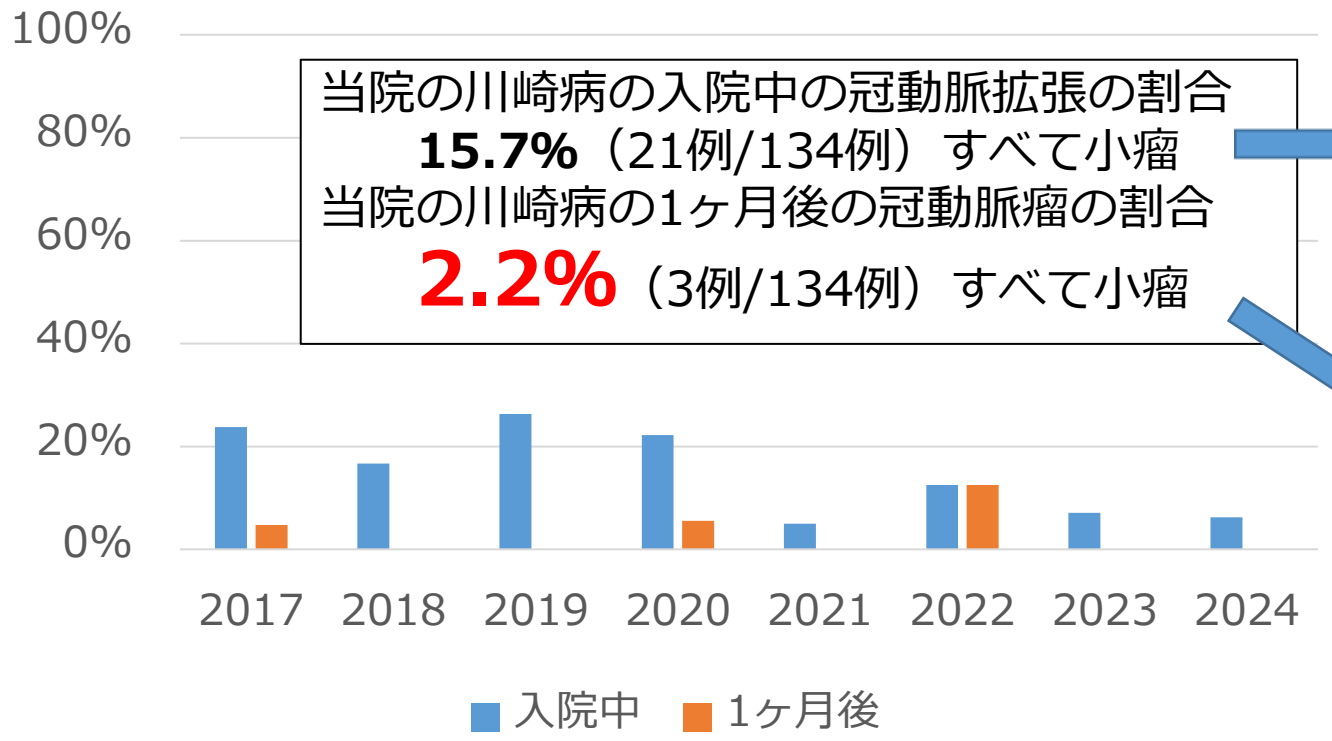
しかし、症例に応じて丁寧に検討し、**ステロイドを使いすぎない** 治療戦略を実施。

（**当院ステロイド使用例：6.7%**（9例（初回治療：2例 (1.5%)、2回目以後：7例 (5.2%) ）/134例）

※全国調査のステロイド使用例：20.6%（初回治療：14.0%、2回目以後：6.6%）(2021-2022)

全国平均より少ないステロイド使用率で、冠動脈瘤は全国平均同等程度に抑制出来ている

当院川崎病例の入院中・1ヶ月後の冠動脈瘤



当院の川崎病の入院中の冠動脈拡張の割合
15.7%（21例/134例）すべて小瘤
当院の川崎病の1ヶ月後の冠動脈瘤の割合
2.2%（3例/134例）すべて小瘤

入院当初からの冠動脈拡張は、
後遺症としての冠動脈瘤のハイリスク因子
（＝それなりのリスク症例を扱っている）
なお、**このうち48%が不全型！**

入院中の冠動脈拡張の全国調査との差は
不全型診断の多さにも依る？

すべて1年以内に退縮確認
真の後遺症としての冠動脈瘤は**0%**
（※全例Zスコアを用いた評価でZ＜2.5）

（参考）全国調査で入院中の冠動脈拡張の割合は6.6%（2021-2022）
1ヶ月後の冠動脈瘤の割合は1.9%（2021-2022）

まとめ

- 当院の川崎病は不全型が多いが、不応例割合は全国平均と同等であり、診断しにくい症例を適格に診断している可能性がある。

- 重症例への治療におけるステロイド薬の使用率は全国平均より少なく、また、入院中からの冠動脈拡張例を全国平均より多く扱っている中で、最終的な冠動脈瘤の後遺症は全国平均と同程度であった。

- 不全型川崎病や、他疾患のように見えた例の症状変化を敏感に察知し、迅速に計画的な治療に載せることで、現在の成績を維持していきたい。